

# Positionalities

東恩納裕一

Yūichi Higashinoma



《Large Interior, Installation view》2021 | Dimensions variable | LED, aluminum, electric wiring | photo: Masatoshi Mori | Courtesy: VOID+

# Positionalities

金光男

Mitsuo Kim



《both#8》2022 | h 803 x w 606 x d 24 mm | paraffine wax, screen printing, canvas, wood panel, burner

# Positionalities

山田周平

Shūhei Yamada



《Mangrove Starter》2022 | h 1940 x w 1300 mm | Screen print on Canvas

2022.7.30 Sat — 8.28 Sun

京都市立芸術大学ギャラリー@KCUA

11:00-19:00 (月曜休館) 入場無料

キュレーション：山本浩貴

主催 | 京都市立芸術大学、Positionalities実行委員会  
助成 | 公益財団法人朝日新聞文化財団、アーツサポート関西、京都府文化力チャレンジ



@KCUA  
KYOTO CITY UNIVERSITY OF ARTS ART GALLERY

京都市立芸術大学  
Kyoto City University of Arts



東恩納 裕一 Yuichi Higashionna

日常身の回りにあるモノに潜む“不気味さ／unheimlich”（フロイト）に触発されて、2000年以降、蛍光灯を多用した「シャンデリア」シリーズ、グラフィティにインスピレーションを得たスプレーによる絵画「Flowers」シリーズ、他に、インスタレーション、アニメなど複数メディアによる作品を展開してきた。近年は、長らくアーティストの制作のベースにあった“不気味なもの”という概念の社会的な意味・機能・有効性を、あらためて問い直すことを試みている。

主な個展

- VOID+（東京、2021）
- KOCA（東京、2020）
- 日本橋高島屋（東京、2017）
- Marianne Boesky Gallery（ニューヨーク、2015）
- Gallery αM（東京、2009）

主なグループ展

- 「Play Double」heimlichkeit Nikai（東京、2022）
- 「GLASSTRESS 2015」Berengo Studio（ベネチア、2015）
- 「MASKED PORTRAIT PART II When Vibrations Become Forms」Marianne Boesky Gallery（ニューヨーク、2011）
- 「The New Décor」Hayward Gallery（ロンドン、2010）
- 「六本木クロッシング2007 未来への脈動」森美術館（東京、2007）



金 光男 Mitsuo Kim

シルクスクリーンの技法を応用し、蠟を塗ったパネルに定着させたイメージに熱を加えることで、そのイメージが溶けて崩れながら回められるという独自の手法を使って作品を制作。その手法を通じて在日3世として日本に生まれ育った状況を投影している。

主な個展

- 「グッド・バイ・マイ・ラブ」LEESAYA（東京、2021）
- 「CONTROL CONTROL」LEESAYA（東京、2020）
- 「APERTO 01 White light White heat」金沢21世紀美術館（金沢、2014）
- 「CONFUSION」MA2Gallery（東京、2014）
- 「Control」eN arts（京都、2014）
- 「SWITCH」AKI Gallery（台北、2013）

主なグループ展

- 「MIKADO2」瑞雲庵（京都、2021）
- 「What's Next?」ARTZONE（京都、2014）
- 「VOCA 2014」上野の森美術館（東京、2014）

主な受賞歴

- 平成27年度京都市芸術新人賞（2016）
- VOCA 2014 奨励賞（2014）
- アートアワードトーキョー丸の内2012・フランス大使館賞／木幡和枝賞
- 群馬青年ビエンナーレ奨励賞（2012）
- 京都美術工芸新鋭展 朝日新聞賞（2012）

主なコレクション

- 京都市美術館、町田市立国際版画美術館、京都銀行、京都市立芸術大学、第一生命保険株式会社



山田 周平 Shuhei Yamada

ニヒリズムとユーモアを背景に写真、映像、立体、平面、と様々な作品形式を展開しながら、ミニマルでコンセプチュアルな作品を制作。近年はテキストを使った作品制作に注力している。2013年、The Armory Showのキュレーション部門において、当時アンディウォーホール美術館（ピッツバーグ）館長のエリックシャイナー（現 Pioneer Works ディレクター／ニューヨーク）により唯一の日本人として選出され、様々なメディアで話題となった。

主な個展

- Daiwa Anglo-Japanese Foundation（ロンドン、2019）
- AISHONANZUKA（香港、2014、2016、2017）
- The Armory Show（ニューヨーク、2013）
- CAPSULE（東京、2012）

主なグループ展

- 「失望」gallery TOH（東京、2022）
- 「HELLO KONNICHIIWA」AISHONANZUKA（香港、2021）
- 「Next World—夢みるチカラ タグチ・アートコレクション × いわき市立美術館 いわき市立美術館（いわき市、2021）
- 「KUROOBIANAACONDA 03 SANMAIOROSHI」TEZUKAYAMA GALLERY（大阪、2021）
- 「MIKADO2」瑞雲庵（京都、2021）
- 「Unclear nuclear」URANO（東京、2016）
- 「Resonance」Sao La Gallery（ホーチミン、2014）

主な受賞歴、ほか

- 写真新世紀優秀賞受賞（2003）
- ISCPレジデンスプログラム（ニューヨーク）に参加（2017）

主なコレクション

- タグチアートコレクション
- G Foundation

「Positionalities」の言葉を冠した本展は、3人の現代アーティスト（山田周平、金光男、東恩納裕一）の作品を並置することを通じて、作家が多様な社会・政治的問題にアプローチするときの立ち位置の重層性を浮かび上がらせる。これまでアーティストが社会・政治的問題に接近を試みるときの、その立ち位置の差異はあまり問われてこなかったように思われる。

「ソーシャリー・エンゲージド・アート」や「アート・アクティビズム」などの用語の流行が示唆するように、今日ではアーティストが作品制作を通して様々な社会・政治的イシューに切り込むことは一般的となった。ソーシャリー・エンゲージド・アートやアート・アクティビズムの観点から眺めると、美術史的文脈とも接続させながら、芸術を通して社会と個人の関係性を問い続けてきた山田、金、東恩納の実践はいずれもユニークかつ重要なものと言える。加えて、ときにエモーショナルにときに挑発的に鑑賞者を刺激する彼らの作品は、アナリティカルで客観的視座を備えた作品の多い日本におけるソーシャリー・エンゲージド・アートやアート・アクティビズムの領域で異彩を放つ。

山田周平は現代社会に対する深い問題意識と関心をもちながらも、作品における彼の立ち位置は一貫してニヒリスティックで冷笑的である。在日コリアン3世の金光男にとって、作品のテーマともつながるアイデンティティの問題は、つねに自らの実存にまわりつき容易に距離をとって眺められるものではない。東恩納の代表作である、蛍光灯を主要モチーフとする「シャンデリア」シリーズは、日本社会に浸透するメンタリティを批判的に浮かび上がらせるが、作品のなかで彼自身の存在感は極限まで減じられている。

山田、金、東恩納はいずれも「社会-個人-歴史」の連累のなかで過激で挑発的な芸術実践を行い、それらは言語化しにくい感情や情動、あるいはその徹底した欠如に基礎付けられている点で共通する。だが、興味深いことに、彼らの作品における彼ら自身の立ち位置は大きく異なる。

複数形の「Positionalities」をタイトルに掲げる本展では、社会・政治的批評性をはらむ現代アート作品のなかにアーティストたちの異なる立ち位置（ポジショナリティ）を前景化したい。それゆえ、この展覧会は「ソーシャリー・エンゲージド・アート」や「アート・アクティビズム」をめぐる学際的議論に対しても、新たな角度から一石を投じるものとなる。

山本 浩貴

東恩納 裕一 Yuichi Higashionna

金 光男 Mitsuo Kim

山田 周平 Shuhei Yamada

# Positionalities

Curator

山本 浩貴 Hiroki Yamamoto

2022.7.30 Sat — 8.28 Sun

京都市立芸術大学ギャラリー@KCUA 11:00-19:00（月曜休館） 入場無料

主催 | 京都市立芸術大学、Positionalities実行委員会  
助成 | 公益財団法人朝日新聞文化財団、アーツサポート関西、京都府文化力チャレンジ

## 関連イベント

### TALK EVENT トークイベント

8.6 Sat 17:30-19:00

会場：京都市立芸術大学ギャラリー @KCUA

〔登壇者〕 東恩納 裕一・山田 周平・金 光男（本展出品作家）、  
山本 浩貴（本展キュレーター）

〔ゲスト〕 寺本 健一（建築家）、島林 秀行（現代アートコレクター）

山本 浩貴 Hiroki Yamamoto | 文化研究者

1986年千葉県生まれ。一橋大学社会学部卒業後、ロンドン芸術大学チェルシー・カレッジ・オブ・アーツにて修士号・博士号取得。2013-18年、ロンドン芸術大学トランスナショナル・アート研究センター博士研究員。韓国のアジア・カルチャーセンター研究員、香港理工大学ポストドクトラル・フェロー、東京藝術大学大学院国際芸術創造研究科助教を経て、2021年より金沢美術工芸大学美術工芸学部美術科芸術学専攻・講師。著書に『現代美術史 欧米、日本、トランスナショナル』（中央公論新社、2019）『ポスト人新世の芸術』（美術出版社、2022）。

寺本 健一 Kenichi Teramoto | 建築家、「Office of Teramoto」代表

1974年埼玉県生まれ。建築設計事務所waiwaiを共同設立し、ドバイと東京で活動。アートセンターやモスクのデザインなどの実績多数。第17回ヴェネチア・ビエンナーレ国際建築展において、キュレーターを務めたアラブ首長国連邦（UAE）館が国別参加部門の金獅子賞（最高賞）を受賞。同部門で金獅子賞を受けた日本人は1996年の磯崎新、2012年の伊東豊雄に続き3人目。現在は「Office of Teramoto」の代表として、日本に拠点を移しプロジェクトを手がけている。

島林 秀行 Hideyuki Shimabayashi | 現代アートコレクター

これから50年間先までコレクターを引退し続けたいという野心家。

### LIVE Music for Positionalities

8.20 Sat 17:00-18:00

会場：京都市立芸術大学ギャラリー @KCUA

〔出演者〕 Genseiichi

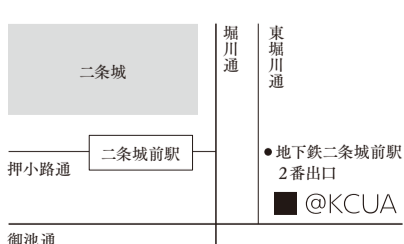
Genseiichi 音楽家

2006年、Impro audio visual unit “a snore.” を結成。suicidal 10cc、KILLER-BONG、Aaron Dilloway（ex. Wolf Eyes）などと共演。2011年よりソロ活動を開始。これまでにshrine.jp（JP）、BirdFriend（JP）、The Irrational Media Society（UK）、Pollen Rec（JP）などより作品を発表。マスタリングエンジニアとしてPiano and Forest（JP）に参加する他“ordinary”も自らマスタリングを施す。また、舞台やファッションショー、映像作品の音楽を担当するなど活動は多岐にわたる。



京都市立芸術大学ギャラリー @KCUA

〒604-0052  
京都市中京区押油小路町238-1  
Phone: 075-253-1509  
E-mail: gallery@kcuu.ac.jp  
https://gallery.kcuu.ac.jp



京都市バス・京都バス：「堀川御池」下車すぐ  
京都市営地下鉄東西線「二条城前」駅下車2番出口より徒歩3分

